発見 元気印企業

AKH研究センターでは、標本作成から診断まで一人の検査技師が担当する

病理診断で地域医療に貢献 日数短縮と画像貼付で差別化

秋田病理組織細胞診研究センターが注目されている。診断報告までの期間の短縮、結果に対する問い合わせへの迅速な対応、報告書へのカラー画像貼付など、患者や臨床医に配慮した取り組みを実施。地元密着型の検査施設の強みを生かし、大手の独壇場だった県内検査市場で独自の地位を築いている。（編集部）

カラー画像を貼付した診断報告書は、検査結果に対する臨床医の理解を助ける

病理組織検査とは聞き慣れない言葉だが、一例を挙げて説明すると、内視鏡で胃の病変部から小さな組織片を採取し、良性か悪性かを診断する検査のこと。細胞診断は、主に子宮癌（がん）検診、乳癌検診などで採取した細胞を観察し癌細胞を探すのに威力を発揮する。いずれも、どんな病気なのか、腫瘍（しゅよう）が良性か悪性か、手術で癌組織がすべて取り除かれたか、などを診断する重要な役割を持つ。

秋田病理組織細胞診（AKH）研究センターは県内で唯一、これらを専門に手掛ける。大手病院の細胞検査士だった阿部一之助社長が地元の医療機関や医師たちの後押しを受け、2003年に開設。現在、常勤医1人、細胞検査士3人、臨床検査技師5人、秋田大学を中心にした非常勤病理医9人を擁し、大手検査機関がほとんどだった委託検査で大きなシェアを獲得している。

診断報告までの日数短縮

秋田県では、常勤病理医を抱える医療機関は少なく、病理診断は県外の検査機関に委託する場合がほとんど。開設当初、その多くが仙台や東京の大手検査機関に外注されていたという。

県内にあるAKH研究センターは検体運搬に時間がかからず、短期間で結果報告できる。阿部社長によると、大手検査機関で1週間～10日かかっていたものが、3、4日で済むという。患者にとって診断結果を待つ時間ほどつらいものはない。臨床医にも時間短縮による治療上のメリットは大きい。

またAKH研究センターには、常勤病理医のほか、病理医9人がローテーションで常駐している。報告診断書を手にした臨床医が疑問を持ったり、助言を求めてきた場合、迅速に対応できる体制だ。何十人もの病理医を抱える大手検査機関ではこうした対応は難しい。「県内に18人いる病理医のうち、半数が当センターで診断に携わっている。大手のように見ず知らずの病理医ではなく相談もしやすいと検査を依頼してくる臨床医からは好評だ」（阿部社長）。

AKH研究センターの強みはこれだけではない。開設当初から診断報告書に組織や細胞のカラー画像を貼付している。診療にあたる臨床医は必ずしも病理に詳しくないため、診断結果に理解を深めてもらうのが目的。患者への説明もしやすくなる。

「同業者からは面倒だし、誤診など裁判になった際は不利な材料になるなどと忠告されたが、大手との差別化のためにもぜひ実施したかった。幸い病理診断を行う先生方の理解があり実現できた」と阿部社長は振り返る。

とはいえ資金が潤沢にあるわけではない。阿部社長は、投資コストを抑えるため、地元事業者に開発を依頼し、機能を絞り込むなど、独自の病理診断コンピューターシステムを構築した。

最近では「手術中迅速病理診断」に積極的に取り組んでいる。検査技師が病院に出向き、手術中に臓器などを受け取り、数十分で診断し、体内の癌組織がすべて取り除かれているかを調べる重要な業務である。地域医療の充実を理想に掲げる阿部社長が自ら出向くことも多いという。

こうした取り組みの結果、多くの臨床医から支持を得た。開設前に懸念した大手検査機関との価格競争にも巻き込まれることはなかった。現在、AKH研究センターに委託している医療機関は約180施設。県内で外部委託される検体数は病理5万件・細胞診10万件で、その3～4割を手掛ける。

人材育成に注力

この検査業務を支えているのが、臨床検査技師などの現場スタッフ。阿部社長は人材育成にも力を入れている。

同センターでは標本作成から報告書作成まで一人の検査技師が担当する。最終的な診断は病理医が行うが、検査技師の責任は重い。入社の条件に難関の細胞診断士の資格取得を掲げ、入社後は年2回の学会発表を課している。このほか常に議論する場を設けるなど、知識や技術の習得を促している。AKH研究センターは地域に貢献する検査機関を目指して前進を続けている。

秋田・由利本荘市

秋田病理組織細胞診研究センター

●会社概要
株式会社秋田病理組織細胞診研究センター:病理組織検査・細胞診検査。代表取締役・阿部一之助氏。設立2003年。資本金2500万円。職員 14名（重複あり=医師1名、細胞検査士3名、臨床検査技師5名、技術員4名、事務員3名、営業員1名）。秋田県由利本荘市薬師堂字芝取場27-1 ☎0184-23-8700 http://akh-rc.jp

高いモチベーションを持ったスタッフによって検査業務は支えられている

トップから一言

地域に根差した診断施設を目指す

株式会社秋田病理組織細胞診研究センター
代表取締役　阿部 一之助 氏

あべ・かずのすけ　1954年秋田県にかほ市生まれ。京浜学園臨床検査学科卒、癌研究会付属病院細胞検査士養成所12回生。臨床検査技師、国際細胞検査士。趣味は温泉巡りと野球。50歳以上で組織する地元野球チームに所属。

経営者らしくないとよく言われます。もともと顕微鏡をのぞくのが好きで、この道を選びました。今も白衣を着て検査の仕事をこなしています。「患者中心の医療、その一員として」とのテーマを掲げて、AKH研究センターを設立したのも、臨床検査技師・細胞診断士としての理想を追求したかったからです。多くの先生方の後押しのお陰で、地域に根差した病理・細胞診断施設に少しずつ近付いています。

もちろん会社を設立した以上、患者さんや社員のためにその永続を目指さねばなりません。予想される倒産リスクは、検体取り違えや誤診と、病理医不在。前者は人材教育やシステム投資によって防ぐ。後者に関しては、当センターは、地域医療充実のため、私と同じ志を持って病理診断に取り組んでいる病理医の集まりでもあり、乗り切れると考えています。

近い将来の話ですが、次の夢も描いています。増え続ける老人のケアセンターと、親を失ったり虐待された子供たちを預かる施設とをコラボレーションさせた福祉事業を実現させたいと考えています。（談）